

大学選びの 視点

第4回

大学の研究に関する情報



このシリーズでは、高校生が志望大学を考えたときに、どのような情報を提供し、指導に生かしていくのか、高校の先生方へのインタビューやアンケートの結果などを中心に紹介していく。

今回のテーマは、「大学の研究に関する情報」である。これには、設置されている学部・学科、卒業論文や卒業研究のテーマ、研究室やゼミの研究主題、科学研究費の採択状況などが含まれる。以前から多くの学校が進路指導の一環として「学部・学科調べ」を行ってきたことや、推薦・AO入試が拡大してきたこと、さまざまな学問紹介や研究紹介のホームページや情報誌があることなどから、ガイド

ライン読者対象アンケート等を見ると、「大学選びの視点」として、「入学者選抜に関する情報」「卒業後の進路」に次いで注目する先生が多い情報である。しかし、情報を見つけにくい、特に低年次の生徒にとっては内容が難しい、あまりに詳細に調べさせるとかえって生徒の視野を狭める場合もあるなど、課題もある。

こうした大学の研究に関する情報の見方や、指導での活用方法について、アンケートで寄せられたコメントを紹介する。さらに2校の先生に、具体的にどのような点に注目しているか、生徒指導の際にどのように活用しているかなどをインタビューした。

ガイドライン編集部では、大学の研究に関する情報をどのように進路指導に活用しているか『ガイドライン』の読者の先生方や「ひらく 日本の大学」データベースを活用いただいている先生方にアンケートを実施した。先生方のコメントを紹介する。

大学の研究について注目している情報

● 卒業論文のテーマ、研究室の研究テーマ等

- ▶学部・学科名だけではどのような研究を行っているのかイメージができない生徒は多い。そのような生徒に対して、ホームページや学校案内などで卒業研究テーマ等を見せて、イメージを具体的にしていく。
- ▶同じ学科名でも、大学教員によって研究分野が違うので、特に学びたいことがはっきりしている生徒に対しては、研究室のホームページを見て、何が研究できるのか調べさせている。特に推薦入試を受験する場合や、出願時に選択する場合にミスマッチがおき

ないように調べさせ、アドバイスをを行っている。

- ▶まずは生徒が自分の夢を持ち、そのために進むべき分野を決めさせるようにしているので、自分の目的に合った研究をする研究室があるかないかは、大学選びの1つの判断材料になっている。ただ、そこまで細分化、専門化するほど、それぞれの生徒が自分の夢を検討しつくしているとは言えないので、ほどほどに留めるように指導している。
- ▶大学の学部の研究内容よりは、大学院の研究を調べる。また、各研究室の発表内容（論文・レポート）を調べる。

● 教員の専門分野、研究テーマ

- ▶大学や研究室によってかなりまちまちであるが、教授名や専門分野名を検索させ、可能な限り情報収集させている。また、可能であれば類似の他分野と比較し、違いを自分の言葉で表現させるようにして志望理由書などの指導につなげている。

- ▶大学のホームページでの研究内容の紹介と、そこに所属する先生の研究論文などを「研究者データベース」などで調べて、生徒の志望理由とマッチするか調べています。
- ▶大学教員の担当科目のみならず、研究テーマ・論文を可能な限り調べさせている。生徒自身が研究したいテーマに沿った教員がどれだけその大学にいるかを考えさせている。

● 科学研究費の採択状況等

- ▶科学研究費の採択状況は、ランキングにして生徒に提供し、偏差値だけではない進路指導データとして活用している。
- ▶科学研究費については資料を口頭で読み上げたことがある。どこの大学で、どのような研究が充実しているのかの一つの目安となると考えているからだ。また、時間がなくてあまりできていないが、どの教員がどの学会に属し、どの企業と連携しているかを調べようと考えたこともある。

● その他

- ▶研究関連設備は情報入手が生徒にも容易にできますので指導しています。しかし、大学の先生の専門分野や卒論テーマ等は、先生の異動が頻繁な昨今、参考にするのが難しいと思うこともあります。
- ▶生徒に自主的に調べるように指導しています。各教員の専門分野や学部にいる教員の人数などを比較する生徒、文系ではその分野の大学院が設置されているかどうかを調べてくる生徒もいます。

大学の研究に関する情報を活用する場面

- ▶質問があったときや、大学・学部の選択に悩んでいる生徒がいるときにホームページ等を参照する。生徒にも学校案内などを使って調べるよう促している。
- ▶基本的に大学を選択する際に、どのような教授が在籍し、それらの先生方がどのような研究をしているのかまで、参考にするように指導している。そのため、本校で取り組んでいる、総合的な学習の時間での卒業研究でも、研究協力をさまざまな大学へ自主的に依頼している生徒も多い。

- ▶推薦入試やAO入試を視野に入れている生徒には、教員の研究内容を確認したり、著書を読んだりするよう指導している。志望理由書を書いたり、面接の内容を考えたりするとき参考になると思う。
- ▶推薦入試やAO入試に挑戦する生徒には大学や学部、研究室のホームページをよく見るように指導し、さらに公開講座などにも参加するよう勧めている。情報を見る際に注目するのは、その大学の特徴である。

情報を活用する際の課題

- ▶国公立大学の理系学部では主にインターネットに研究室の研究内容や学生の卒業論文が出ていたりして大いに参考にしています。しかし、私立大学の文系学部ではこうした情報はあまり見当たらず、難しさを感じています。
- ▶生徒に調べさせる価値はあるが、情報がどこにあるのかわかりにくい点が難点である。内容も、研究費や設備等は理解しやすいが、専門分野や研究テーマは高校生にとってはわかりにくい。
- ▶インターネットで調べることには、生徒や保護者はかなり慣れているのですが、自分で調べたことを絶対化するような傾向が出始めているように思います。いわゆる情報を対比し吟味させるような指導をしたいのですが、それには膨大なリソースと時間が掛かり、そうした点に外部の力を借りたいと考えています。
- ▶インターネット上の情報よりも、先輩たちの生の声は有効である。生徒たちの興味・関心だけでなく、どこまで学問的な理解ができているかが重要である。

あまり参考にしない

- ▶一部の生徒には活用しているが、あまり専門的すぎるところまでこだわって選択肢を絞りすぎないように指導している。あくまでも興味を持つためのきっかけづくりという意識である。
- ▶入学後の研究までを視野に入れている受験生が少ない中、大学での研究に関する情報までを活用する機会はあまりない。入学後にやりたいことをいろいろな面でフォローできる包容力があるかどうか、を調べさせている。

▶特に細かい分野まで関心がある生徒がいれば一緒に調べたりするが、基本的には、研究より、就職に関しての情報を重視する。

▶大学の先生の研究テーマを調べていたときもあったが、今はしていない。掲載された情報と実際に行われていることが、感覚的に違うことが多いので。

Interview 1

高校の先生に聞く、進路指導での大学の研究に関する情報の活用

北海道登別明日中等教育学校 ^{あけび} 伊藤元也先生 稲子寛信先生

(本文中敬称略)

■ 面談や進路行事を通じて生徒の視野を広げる

伊藤 私は「その大学に行ったら何を勉強し、どのような進路につながるか」を意識して大学選びをするように、生徒に促しています。現在、学部・学科名だけでは学ぶ内容や卒業後の進路をイメージすることが難しい場合も多くあります。例えば「食品」に関する研究や就職をしたいと思っても、「食品学科」を設けている大学はあまりなく、食品にどのように関わりたいのかによって、栄養系、バイオ系、化学系など、さまざまな学部・学科を見ていく必要があります。また、情報の調べ方も課題です。現在担任を持っているクラスに、野外実習等を通じて学びたいという文系の生徒もいます。そうした学びは、例えばフィールドワークを重視する地理学科や環境経済学科などでもできるのですが、「フィールドワーク」をインターネットで検索すると、企業等が行うものや、掲示板等での不確実な情報も見つかるため、必要な情報の取捨選択が難しいのが現状です。ですから、面談等の際に生徒が何を学びたいのかを聞き、情報の見方や調べ方をアドバイスするようにしています。

稲子 生徒の視野を広げさせることも重要です。本校では中学3年次に大学見学を行っています。昨年からは生徒全員に、文系と理系の大学を見せるようにしました。例えば昨年は、事前の調べ学習や講義、研究室見学などを通じて、「経営学はお金儲けの学問だと思っていたが、消費者、経営者、競合他社などの心理も関連している」ことに気が付き、経営学に興味を持った生徒もいたようです。

■ 研究テーマや学び方など多様な情報に優先順位をつけ 生徒の主体的な大学選びを促す

稲子 また、私は大学での学び方にも注目しています。本校は大学進学後に外国の大学への留学を希望する生徒も多いので、提携先の大学、留学期間、私費留学の割合などの情報を見えています。大学教育に関しては「キャップ制」「GPA」など特有の用語がありま

すし、「アクティブラーニング」「eラーニング」「反転授業」なども話題となっていますが、生徒にとっては理解しにくいと思います。大学ではどのように学んでいくのか、学生の声も聞きながら、生徒に伝えていく必要があるでしょう。

伊藤 大学での学び方に関連して言うと、大学のカリキュラムを見せられると良いと思います。例えば入試で英語と国語だけしか課されなくても、経済学部では必ず数学を使って学びます。しかし、生徒は入試科目にばかり注目して、そうした状況は見落としがちです。高校での勉強は大学入試がゴールでないことを伝えるためにも有効ではないでしょうか。

稲子 教育方法や内容については、ゼミが始まる学年などにも注目しています。また、理系の場合は、インターネット等で研究室の研究テーマまで調べるよう、生徒に伝えています。

伊藤 研究テーマについては、生徒に紹介することの難しさも感じています。特に文学部などでは、テーマだけを見ても、どのように研究を進めてどのような内容をまとめたのか、イメージしにくいことも多いのです。実際の研究の進め方などについて、卒業生などに語ってもらうのは有効だと思います。

稲子 現在は大学に関する情報が非常に多様で、生徒も判断基準が多い分、選択が難しくなるとともに、イメージの相違を感じることも多くなっています。

伊藤 情報から持つイメージと大学の実態は一致しないこともありますし、大学受験の際にはどうしても妥協しなくてはならない場面もありますから、あまりにいろいろな情報にこだわって志望を絞りすぎないことも重要です。「絶対に北海道大学に行く」でも、「現役で経済学部に進む」でも、「都会でキャンパスライフを楽しむ」でも良いですから、優先することを決めて、それに合致した大学をなるべく幅広く調べさせるべきでしょう。そうしたアドバイスをしながら、生徒自身が主体的に情報を集め、大学選びをできるように支援していきたいと考えています。

Interview 2

高校の先生に聞く、進路指導での大学の研究に関する情報の活用

鶴見大学附属中学校・高等学校 鈴木重夫先生

「学びから入る進路指導」をキーワードに
体系的な進路指導を行う

本校では「学びから入る進路指導」を掲げて進路指導を行っています。職業調べから入る進路指導のほう
が指導の計画は立てやすいのですが、中学校3年次
や高校1年次に職業を調べると、生徒は自分の知っ
ている職業に注目し、小学校教員、保育士、看護師な
どの専門職ばかりを挙げる傾向があります。そうした
職業を目標にしてもよいのですが、学びが進んできた
からこそ見えてくる職業もあると思うのです。例えば、
理科に興味のある生徒が土壌生物と環境問題に関連
する職業に出会ったり、社会科の学習を進めるうちに
文化財保護の仕事に興味を持ったりできるような指
導を理想としています。そこで、高校1年次10月の
文理選択調査までにさまざまな学びに触れる機会を
作り、生徒に進路を考えさせています。

高校1年次7月には教育系企業が提供するプログ
ラムを活用して、大学での学びを意識するよう働きか
けています。具体的には、「環境」「東京スカイツリー」
「和菓子」など多様なキーワードから、生徒が興味
のあるキーワードを選ぶと、そのキーワードに関連した
研究を行っている大学教員からメッセージが届くサー
ビスです。生徒は、興味を持っているキーワードが学
びに繋がっていることを感じられる、非常に重要な機
会となっています。

2学期には文理選択に向けて、大学入試に関する
講演や、進路適性検査などを実施します。10月上旬
には、鶴見大学の教員の講演を聴きます。「大学での
学び」をテーマとして、文学部の教員にはゼミの活動
や卒業論文などについて、歯学部の教員には理系の
研究の面白さについて、短期大学の教員には短期
大学の現代的な意義などについて語ってもらいます。
また、大学での学びに関する情報誌は時機に応じて
配布するようにしています。

2年次には、会場ガイダンスへの積極的な参加を
促すとともに、夏休みに3校以上のオープンキャン
パスに参加しレポートを書くことを宿題としています。
そうして志望大学を考えてゆき、2年次3学期には、
全ての生徒に志望理由書を書かせています。一般入
試での進学をめざす生徒も、志望理由書を書くこと
で改めて大学で何を学びたいのかを考えるため、志望
校をより強く意識するきっかけになると考えています。

このほか、特活LHRの時間には、進路通信や市
販の進路学習教材を用いて体系的に進路研究を行っ
ています。このように、一つひとつの活動を「学びか
ら入る進路指導」という方針に結び付けていることが
本校の特徴です。

進路指導室やメディアセンターで
生徒がさまざまな資料を見られるようにする

そのほか、生徒が大学に関する資料に触れやすい
ような工夫もしています。例えば進路指導室は放課
後等に開放し、資料やパソコン等を自由に使えるよ
うにしていますし、生徒に「進路委員」を設けて資料
の整理を手伝ってもらっています。こうした点も生徒
の進路意識を高めることにつながっていると感
じます。大学のパンフレット等だけでなく、研究内容を
紹介する情報誌等も集めるようにしています。例えば、
社会学については、大学の研究室から卒業論文集を
もらい、自由に見られるようにしています。高校まで
の科目とは直結しないためイメージしにくい学問分
野ですが、非常に多様なテーマで研究することができ
ることがわかり、生徒も興味を持つようです。また、
心理学についても分野の全体像をまとめた情報誌を
置き、臨床心理だけでなく、幅広い研究があること
を伝えるようにしています。

理系の場合は同じ大学の同じ学部・学科であ
っても、研究室が違えば学ぶ内容が全く異なる場合
があります。また、推薦・AO入試を受験する生徒は、
進学後の研究まで意識して志望校を考える必要があ
ります。そこで、大学が研究室ガイドなどを発行し
て取り寄せるようにしています。ただし、全ての研
究室を網羅した、高校生にもわかりやすいガイドを
作成している大学もありますが、大学によっては一部
の紹介に留めていたり、内容が難しかったりするた
め、活用には課題もあります。なお、理系の研究
室紹介については、理系に興味を持つ生徒に見て
もらう機会を増やすため、理科のメディアセンター^(注)
にも置いてあります。

大学の研究に関する情報は、文系のイメージし
にくい分野や理系分野で揃え始めている状況です
が、今後はさらに幅広い分野について体系的に
指導できる体制を整えていきたいと考えています。

(注) 鶴見大学附属中学校・高等学校は、ホームルーム等を行う「ホームベースエリア」と、各教科の授業を行う「教科エリア」からなる「教科エリア型校舎」を採用し、教科ごとに教室を移動して授業を行っている。メディアセンターは教科エリアの一角に設置され、各教科の特性に応じて生徒の興味・関心を喚起する資料を展示したり、テーブルや椅子を設け自習や指導に使えるスペースとして利用したりしている。